

NPOokayama

特 集

特集 あらためて「地方創生」を考える

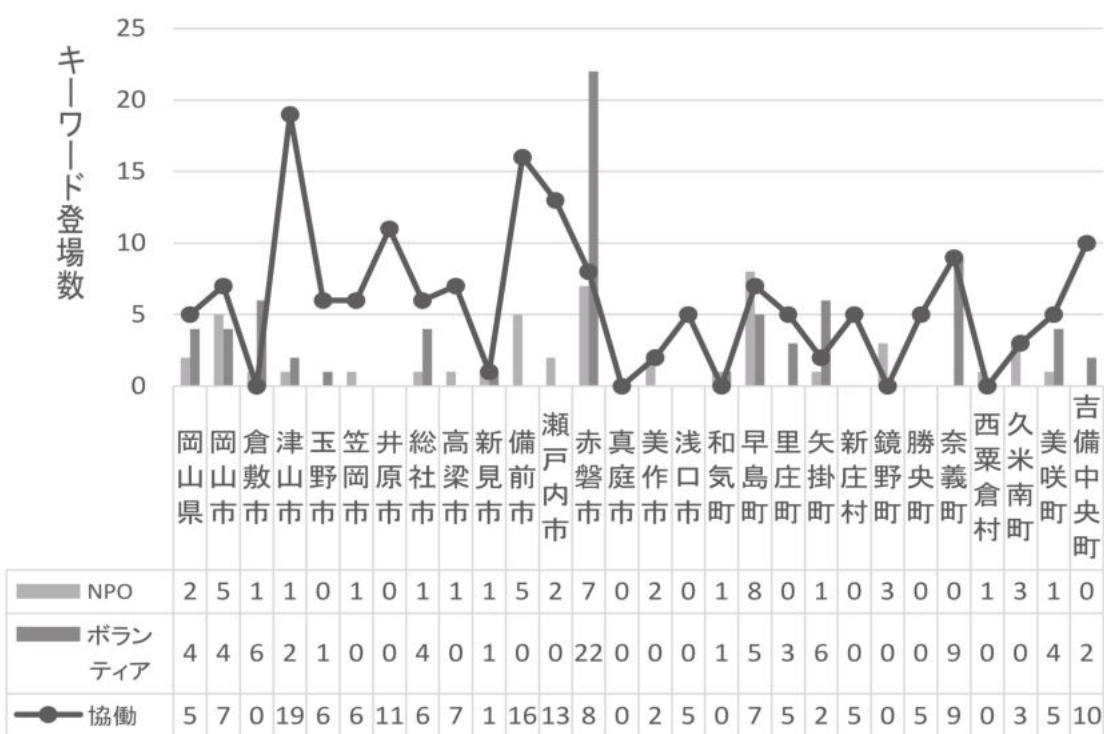
- * 調査報告 まちひとしごと創生総合戦略での「協働」「NPO」取り扱い度調査 01
- 県内 27 市町村人口ビジョン（2040 年までの予測）..... 08

- * 実践から学ぶ「まちづくり運動」と「NPO 経営」について
- 岡将男さんロングインタビュー 02

【調査報告】

まちひとしごと創生総合戦略での 「協働」「NPO」取り扱い度調査

2015 年



まちひとしごと創生本部の動きを受けて、岡山県及び県内市町村でも「人口ビジョン」と「総合戦略」が策定されています。総合戦略は、「長期ビジョン」を踏まえ、2015 年度を初年度とした 5 か年の政策目標や施策の基本的方向、具体的な施策をまとめたものです。本調査は各自治体が公開している総合戦略の中に何回「協働」「NPO（特定非営利活動法人含む）」「ボランティア」という単語が登場するかをキーワード検索をして調査した結果です（当法人の独自調査）。各地域でその登場数には差があり、協働というキーワードが登場しない自治体（真庭市、和気町、鏡野町、西粟倉村）もあります。一方で子育て支援による自然増に NPO やボランティアと協働で取り組むことが明記されている赤磐市、市民協働発電所や共創・協働の地域コミュニティづくりを掲げる津山市等はキーワードの登場数も多く、市民や民間組織とともに地方創生を目指す内容となっています。

特集：あらためて「地方創生」を考える。

・ 社会をや
・ し
・ な
・ を
・ 変
・ カ
・ え
・ に
・ る
・ 。

【これからの NPO に必要なこと 第4談】

岡 将男さんロングインタビュー 実践から学ぶ「まちづくり運動」と「NPO 経営」について

岡 将男

OKA Masao

1954年7月6日 岡山市生まれ

幼い頃から、鉄道模型や旅客機に興味を持つ。

1977年 東京大学経済学部経営学科卒業。

1977年 家業の中国食品工業へ就職。

常務取締役を経て代表取締役社長。

1985年 ホバークラフト京橋就航運動を実施。

1986年 岡山未来デザイン委員会、発足。

1987年 内田百閒生誕百周年運動。百鬼園俱楽部、発足。

1988年 故郷阿房列車を初運行。

1989年 『岡山の内田百閒』刊行。

1989年 備前岡山京橋朝市、初開催（実行委員）。

1995年 路面電車と都市の未来を考える会（RACDA）設立。

2010年 RACDA 法人化「NPO 法人公共の交通ラクダ」に。

2014年 『吉備邪馬台国東遷説』刊行。

その他、活動・運動に関する書籍発行は多数。

これから NPO に必要なことは何なのか、NPO のリーダーにこれまでの経験とそして今こそ考えるべきテーマを問うインタビュー。その第4談となる今回は「NPO 法人公共の交通ラクダ」他、様々な活動を展開してこられた岡さんに伺います。

地方創生の名のもと国のリードにより東京一極集中を回避し、地方への流れをつくるための政策が展開されています。「地方」と呼ばれる私たちが暮らす岡山でも市町村及び県がそれぞれ「人口ビジョン」と「創生戦略」を策定し、取り組みが展開されています。そこには「地方公共団体に限らず、住民代表に加え、産業界・大学・金融機関・労働団体・言論界（産官学金労言）の連携を促すことにより、政策の効果をより高める工夫を行う」と書かれていますが、住民代表と一言書かれ略語（産官学金労言）に入っていない

多様な市民（NPO や地縁組織）の主体的な関わりことが大事なのではないかと思います。

岡さんは歴史や文化に造詣が深く、また会社経営をされていた観点から経済や経営の面からもまちづくりを考えて、自ら実践をして来られました。今回のインタビューには出てきませんが今、岡山市でまちづくりのスポットの一つでもある西川緑道公園で1990年代に展開されていた「西川フリーマーケット実行委員会」の発足メンバーもあります。そうした経験から「まちづくり」に必要な観点は何なのか？どうやって取り組みを展開していくのか？そして、これから NPO に必要なことは何なのか、について、経営的な面からも伺っていきます。

（聴き手 副代表理事 石原達也）

趣味は「鉄道模型」。 そこから見えてきたもの。

石原：岡さんがこれまでされてこられた取り組みは、僕らも端々で聞いていますが、今日はあらためて、そのルーツから順番にお伺いできればと考えています。

岡：僕が今までしてきたことは本に大体なっています。「岡山の内田百聞」、「吉備の古代史」、路面電車やバスマップの本、脱原発の本など。やはり、本を書くことはすごく大事で、京橋朝市に参加する前は「内田百聞の岡さん」と呼ばれていて、その後「京橋朝市の岡さん」の時期があり、「RACDA の岡さん」の時期があって、今は「吉備古代史の岡さん」みたいになっている。けれど、趣味は鉄道模型と吉備の古代史だから。これは大学時代から全く変わってない。そういう意味では自分の好きなことしかしていない。皆、世話好きだと社交的だと割と勘違いしているけど、でも僕は鉄道模型オタクですから。基本的には(笑)。世の中では「オタク」を悪いイメージと捉えるけど、オタクって言葉ができたときに喜んだんですよ。「自分を表現する言葉が出来た!」って。ようやくそういう時代になるのか、ってね。

石原：その大学生の時には、どういう呼ばれ方だったのですか?

岡：そもそも人と交流せずに自分1人でする鉄道模型ですから分からない人は分からぬ。僕の為に作る鉄道模型であって、家に置いてあって、人に見せるものではないですよね。趣味で交流するのはあまり好きではなくて・・・(笑)

石原：でも RACDA の行事などで出されたりしていますよね(笑)?

岡：ところが、皆が作らないと商品が出てこない。自分が欲しい車両を発売してもらおうと思うと、もちろん自分でも全部作るんだけど、やっぱり発売された方がいい。その方がさらに良いものが作れるんだよね。だから、自分の趣味を広めないと、結局自分に見返りが無いということを中学時代くらいから分かっている。そのためには最低限、広げる努力はしないといけない、という。今まさに僕らがしていることですよね。「自分の為にしようと思ったら、人の為にするしかないよ」というのを、鉄道模型から入っているわけ。

石原：なるほど。それを中学生の頃からですか?

岡：中学1年からですね。Nゲージっていうのを始めて、勉強せずに模型ばかり作ってましたね。そこから見えてきたものはたくさんある。現代社会のいろいろな問題とかね。鉄道模型があつたから、東大に入れたのかもしれないというくらい。だってね、文系も理系も両方要るんだから。鉄道模型を作るというのは。まず図面が書けるわけですよね。それから、木工工事や電気配線が出来て。これは「まちをつくっていく」という点で建築士と同じ仕事ですね。だから、自分の家も自分で設計してますし。模型を作って、模型のとおりに作ってもらうとかね。

石原：なるほど。それで東大に(笑)。

岡：でも「まちをつくらんといけん」ということになると、社会学的な部分だから。その当時の(岡山市街地)鉄道模型をつくる。「昭和〇〇年代の岡山のまちを再現しよう」とかね。それを中学、高校くらいで始めた。社会勉強から入って、その地域の歴史とは何か。今度は取材に行って、写真を撮って、それを図面に起こして、抽出して「まちづくり」を模型の世界で。それを大学卒業した年に「鉄道模型新聞」という本に投稿したんだけど、そこでトップになった。それはやっぱり大きな成功体験で、評価されるとか、何部くらい本が売れるとか。23歳でもちゃんとトップに立てたわけ。

石原：中学からでしたら、その時点でキャリア10年ということですもんね。

岡：そういうことだね。だから10年続けて、全国誌に出たのが11年目くらい。あれから40年近く経っているけれど、今で、分かる人は「あれって岡さんでしたか!」とわかる。そこでやっぱり、「小さい世界だけど日本のトップに立った!」というような喜びがありますね。評価されるというのは、ものすごい成功体験。

石原：しかも社会学的な観点から、模型を作るというところまでがトータルの評価だったんですよね。

岡：言ってみたら、14歳でも入賞する人だっている。やっぱり、それなりのものがなかったら勝てないんじゃないかな、という概念は当時持っていた。

地方に必要なのは文化力。

石原：そうした東京大学時代の後に、岡山に帰ってこられた。

岡：「商売をやらにゃいけん」という家庭の事情もあったので。

石原：お家を継がれるということですか。

岡：逆に言うと、会社が潰れそうだから帰らなくちゃいけない。それから東京が嫌い。あそこに住みたくない、っていうね。

石原：なぜですか?

岡：「あんなメガロポリスは住みにくい」と思ったからね。だけど面白い。だから4年間は絶対に東京に行こうと思った。その間に世界を歩いて、遊んでまわって、お金使って、みたいなね(笑)。だけど、住むのは岡山。なぜかというと、鉄道模型の部屋が要るんだよね。

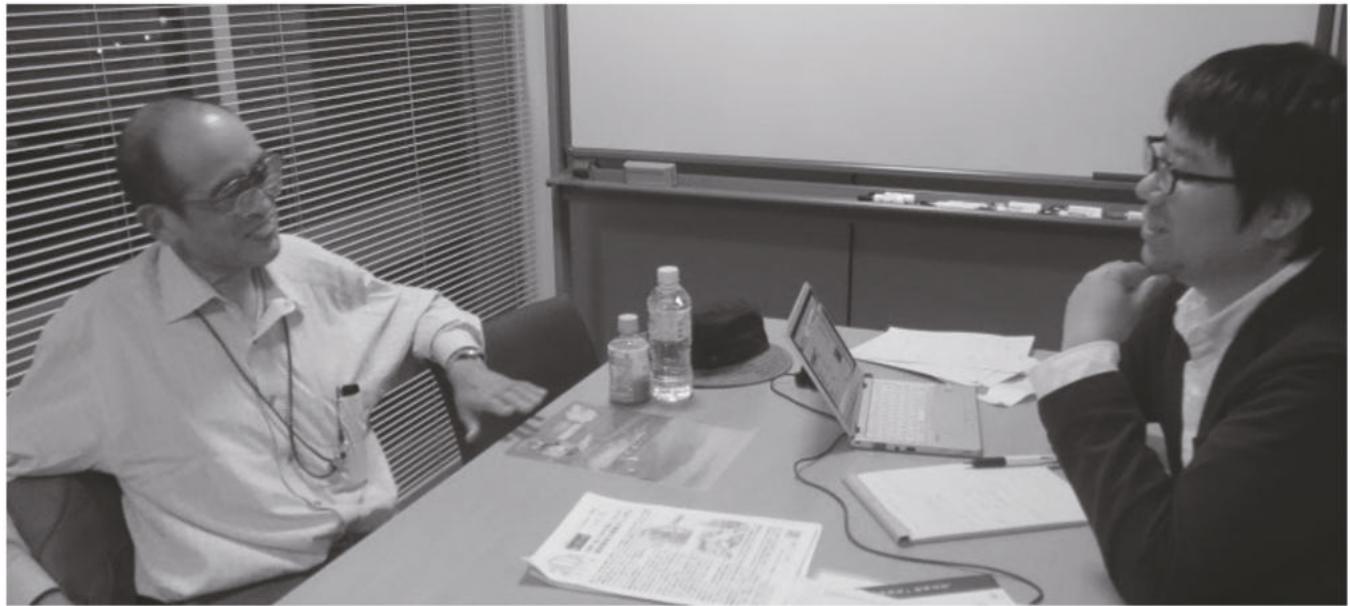
石原：なるほど。物理的に広いスペースが要ると。

岡：そうすると東京では無理。

でも来年でちょうど鉄道模型を作って50年になるけれど、300万円くらいしか使ってないですよ、お金は。現金で。

石原：思ったよりも少ないですね。

岡：制作時間は、今ある鉄道模型全部で4,000時間とか。僕の作る能力に1万円位の価値はありますから。そうすると、4,000万円というものが労力として使われている。



岡：ところがもっと高くついているのは場所代なんですね。もし東京で8畳の部屋を確保しようと思ったら今でいえば月10万円くらいかかる。そうすると、40年間その部屋を維持したということは、4,800万円。

石原：費やした時間と同じくらいになりますね。

岡：でも現金ではなくて、やっぱり「地方で文化的な生活を送りたい」「自分のしたいことをしたい」というのが目標の3分の1くらいありました。岡山に“意識して”帰って来ているわけです。「岡山は面白くないけど、暮らしやすい」。それで、「なにか岡山を面白くすることをしよう」という。

石原：そうして岡山に帰ってこられた。

岡：岡山に戻って10年間ほどは仕事(家業)だけをしていた。その後、「岡山を面白くしようとする運動」に入ったのはなぜかというと、県外に出て営業をしていると、岡山の名前が有名じゃない。倉敷は知っているけど岡山は知らない。それは僕にとってマイナスだった。知っているところなら「遊びに行くぞ!」となるけれど、岡山だと行こうという話にならない。もうちょっと岡山は有名にならないといけない。歴史もあるのに。やっぱりもう少し頑張らないといけないんじゃないかな、というのでまちづくりに入っていくという。これも自分のためだね。

石原：でも、大学の間、東京の方が刺激は多かったんじゃないでしょうか。それこそ新商品が出るのは東京の方が早いでしょうし。

岡：そうだね。中学高校時代から塾をさぼって、お金を使って(笑)大阪によく買い出しに出かけていましたね。だって、岡山にはないんですよ。人口100万以上の都市じゃないと鉄道模型のお店が成り立たない、ということですよね。大学卒業した時に、5万部売れるという鉄道模型新聞の取材が僕のところに来てね。東京都内で4万5000部、大阪市外で5000部売れると。

石原：もう残りが無いじゃないですか(笑)岡山の分が。

岡：岡山は2部とか。

石原：2部!(笑)

岡：鉄道模型が「趣味」と認められていない。「いつまで、おもちゃを作っているんだ?」みたいな。そこで既に文化力の差を感じているわけですよ。東京と地方は圧倒的な差がある。市場で見ても、東京ならどんな店や仕事でも成り立つ。

石原：人口の差だけではなく、文化の差があると。

岡：祖父が結構な“旦那”だったんですよ、倉敷の庄屋で。美術や芸術がいつもそばにあるような家だった。おかげで日本一のマラソン選手でオリンピックに出撃ねたとかね、やっぱりトップに立ったことがあって。そういうおいをかいでいた。児島虎次郎の絵が家に1枚あって、それで児島虎次郎のことを調べると、大原家にたどりつく。大原家の事を調べると、色々な研究書が見つかるんだよね。一方、叔父が書家で、「アートで飯が食えない」と言う。そんなこともあって、都市で文化をちゃんとしないと、ダメなんじゃないかと。その頃から明確に思っていたわけですね。

お金とは何か。 会計学と経営学と歴史学。

岡：そこから大学の時に会計学のゼミに入るわけです。そこでやったのが「国際会計基準」なんです。文化が違えば会計制度も違うとかね。「グローバリズム」が世の中に「アングロサクソン・スタンダード」みたいなものを作るのを間近に見た。そこで勉強したことは、「法律は作るものだ」ということです。

それから、会計は非常に大事だということ。物事の価値をいったん貨幣に置き換えてみるという意味はある。でも、経営学だった

目に見える部分と見えない部分。それを計算した上で、もう一度判断しなおす。

から、基本的に言えば、いったん貨幣に置き換えるんだけど、「貨幣で計算できないもの」を判断することが経営者の仕事。その歴史が経営学にはあるわけですよね。実は歴史学の範疇でもある。例えば、経営学でも三国志がどうとか色々な本があるじゃないですか。

石原：兵法と経営を結び付けて考える本も多いですね。孫子とか。

岡：ああいうので言っているのと変わりない。人間は進歩しないので。会計学をやったことで見えたことは、自分の実家は佃煮屋で、四半期ごとに決算するんだけど、実際うちの会社の仕事を見ていると、10年間に一度くらい、原料のちりめんが大暴騰するとか、大暴落するとかで結局20倍くらい決算が動くんですよ。そうした相場がよく動くものを扱う商売は短期的な決算でなく10年単位で見ないと本当の損益って出ないな、とかね。少なくとも、農産物を原料に使う場合は、1年以下の単位で見ることはあまり意味がない。それが、大学時代の勉強を通じて「ビカッ」と分かった状態で商売に入っていた。それを今度はまちづくりしていくときに、ちょうど商店街問題とかね、そういう部分に会計や経営の考えがほとんど入っていないということに気付く。

石原：お金の流れを長期的にみる視点が足りないと。

岡：「お金とはなにか」ということをずっと突き詰めて考えていると、これが割と時代背景にはまる。お金がないと動かせない、というNPOの問題にもつながる。お金の問題を、基本的には皆、分かっていない。僕は分かっていますけどね、会社が潰れたから。自己破産までして。そのときに完成したようなもんです(笑)。

石原：あのときは本当に大変だったでしょうね……

岡：総社の叔父が証券屋で、相場師だったから、そういう部分は小さい時から訓練されて見えていた部分があった。

さっきも言った、「鉄道模型にいくら使ったか」ということにも、目に見える部分と見えない部分がある。それをトータルで計算してどうなるか考えた上で、もう一度判断しなおす。その見えない部分が、どうしてもNPOだと「ただ働き」とか思われるがちだけれども、それは、全然違う。

石原：そうですね、本当に。NPO会計基準のボランティア評価益にも通じますね。

岡：例えば、商売だと時給4,000円かかる。それをNPOで同じ時給4,000円払おうとしてもそこまでお金が集まらない。だからといって時給1,000円だとその人が食い潰れてしまう。時給2,000円でやります、というのなら、なんとか持続可能ということ。だけど、本当にサスティナブル(持続可能)にしようと思ったら、運動を継続していくことです。

石原：現実と理想とのバランスを見ながらの経営ですね。

岡：そういうことをずっと思いながら、RACDAの経営でも苦

労していて。

石原：そうですよね。毎年しんどいです、僕も。経営が難しいのは、NPOも企業も同じですね。

岡：僕も一人でやっている。結局自分で全て考えて、資金繰りしている。一定のところで判断しますね。皆から見て、認めてもらえるように。そういうところは、会計学の専門家として常に判断をする。基準は自分ですから、そのための学問が絶対に必要。

公共とは何か。 生かされていることと、 切り捨てないこと。

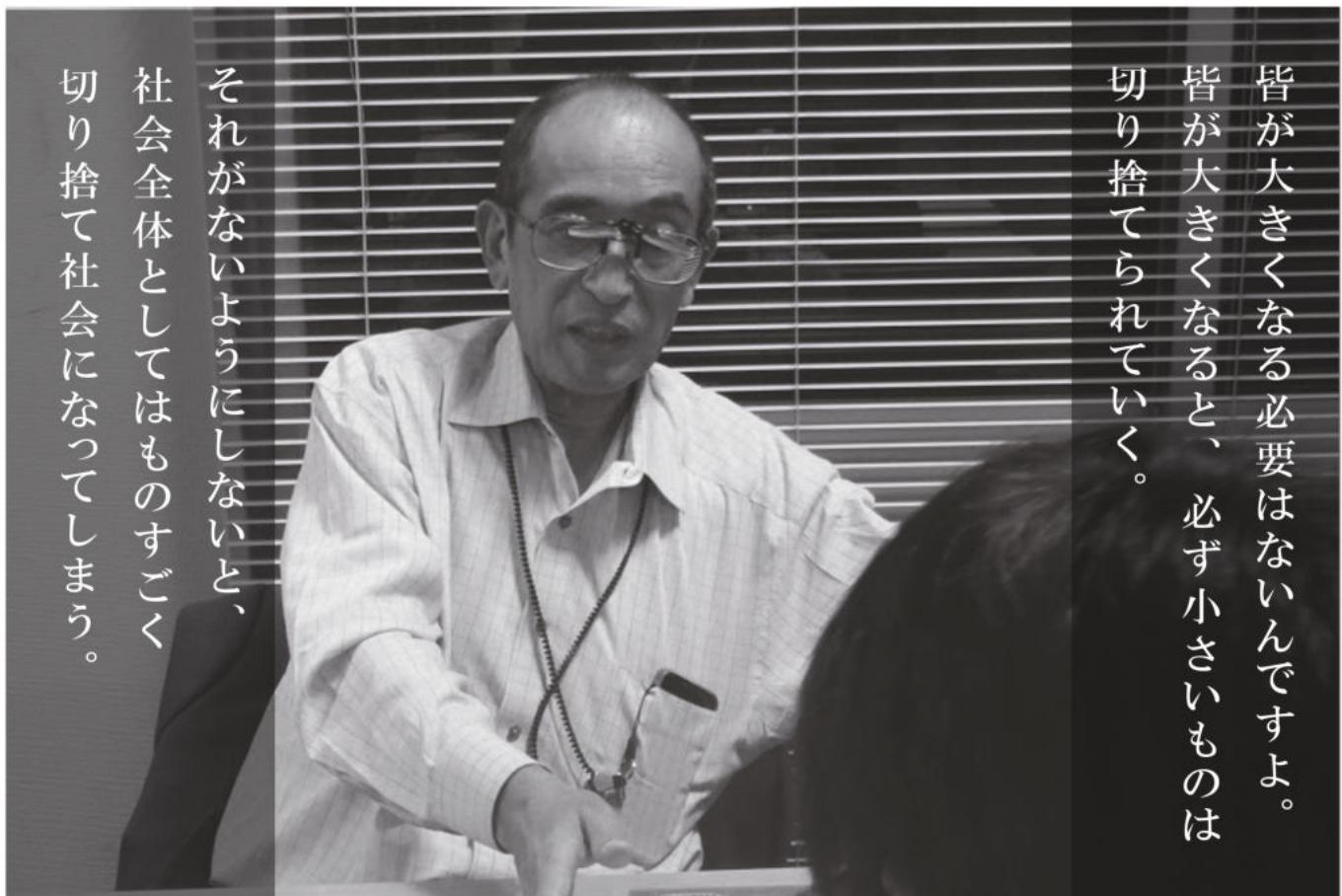
岡：でも、そこで社長はやっぱり公共だから、最終的には公共とは何か?ということを突き詰められるわけですよ。それは自分で決めればいいこと。経営学で大事なのは「人間の良心」みたいなものと思っています。僕の中での原点は法三章(秦の始皇帝の定めた殺人・傷害・窃盗だけを罰するとした3カ条の法律)ですね。これ以上のものはない。そうすると、全てのことが相対的に見えてきて、それに基づいていろんなことをしている。常に、最初に立ち返る瞬間もあるんだと思ってやらないと。お金も同じことです。生命の安全(殺人・傷害の禁止)、自分で稼いだ分は自分のもの(窃盗の禁止)。これだけです。その目で、まちづくりやNPOの問題を全部見る。ということに合意している人でなければ、RACDAに参加しても務まらないかもしれません。

石原：全体の判断と個人の判断が分かれることもありますよね。公共の難しさがあると思います。

岡：実は29歳くらいの時に鬱になったんです。10年苦しんで。でもそれが周りにわかると会社が潰れるかもしれない。自分で完璧だと思っていた考え方方が全てぐちゃぐちゃに壊れてしまった。それで「まちづくり」に入るんだけど。

石原：なぜそうしようと?





岡:なんだかんだ言って「生かされているだけだ」と 29 歳の時に悩んで気づくわけです。全てがぐちゃぐちゃになって 10 年間苦しみながら「まちづくり」に入った。そこで新しい価値観に目覚めていく。「社会に奉仕しなければいけない」とかね。商売やって儲かっていた時は、調子に乗るし、逆の時もあるし。それで物事を相対的に見る、全体的に見るというのは上手くなっているのでしょうかね。「こんな人もいる、あんな人もいる」と否定をしないで、見る。

石原:いろんな立ち位置の人の気持ちが分かる。

岡:大学を出て多くの人が大企業に行った中で、岡山で中小企業を経営することで見えるものもたくさんあった。中央市場を営業してまわって、それで見たことも随分あったね。それに東京から帰ってきて、すぐに社員 40 人のうち 10 人をリストラしなくてはいけなくなった。そこで驚いたのは、中に 3 人、字が読めない人がいたこと。最初の何年かはすごく腹が立った。ところが、腹を立てたって現状がそうだから、仕方ない。そして儲かったら、今度は経営者の中でも色々と問題が出てくる。そこから「社員を養うことが自分の仕事なんだ」と目覚めていく。そうすると、色々な能力があることに気付く。

そんなことがあって、やっぱり中小企業は儲けや税金払うばかりが能じゃない。儲けようと思うなど。皆が大企業になる必要はないんですよ。大きくなる必要はない。皆が大きくなると、必ず小さいものは切り捨てられていく。それがないようにしないと、社

会全体としてはものすごく切り捨て社会になってしまう。

良いものは広がる。 だから、自分を楽しくすることに徹する。

岡:20 年くらい前からよく使っているんだけど、まちづくり運動は「自分を楽しくすることに徹する」ということ。良いものは広がる。自分がオタクだということもあるけれど、一番価値があるのは遊び。「遊びと文化」ではないか、と。例えば分かりやすいのは、工業がダメになって、映画と IT が主力となっているアメリカ。ビル・ゲイツのようなオタクでお金の稼ぎ方がうまいやつらがトップに立ったというだけで。そうすると、最終的に「遊び、文化、オタクの社会化」と僕はよく言うけど、それらが飯を食わすような時代になっている。それで、RACDA ができた。

石原:好きなことを突き抜けることが社会を変えると。

岡:それともう一つ僕が言いたいのは、「市民運動は政治だ」ということ。

石原:政治を変える、提言・協働するのも NPO の役割だと思います。

岡:岡山県知事の長野さんに「まちづくりグループを作りませんか。支援します」と言われて、「岡山未来デザイン委員会」を作った。集まったメンバーは、まちづくりに挫折したことがあるような人

もいた。その中で、自分だけまちづくりに関わったことがなく、年齢も10歳下。でも、の中でも一番発言するし、主張していた。10歳も年が離れていたからか、まわりのメンバーは腹が立たなかつたんじゃないかな。

石原：会社経営しながらまちづくりは大変だったんでは？

岡：社長や経営者をお金持ちと批判する人もいるけれど、経営者は皆大変ですよ。日夜、金や目先のことしか考えられない。それは仕方のないことです。自分が鬱になってみて、よく分かった。だから、「楽しく面白くせんといけん」という考えになり、まちづくり運動に入っていった。その中で友人もたくさんできた。結果、会社が3倍くらいの大きさになってね。

石原：すごいです。まちづくり人脈の中で会社が大きく？

岡：僕が「まちづくり」をしていなかったら潰れていたかもしれない会社が、その後30年間続いた。僕が路面電車の話を北陸へ行ったときの話を社員が営業の時に使って、大きなスーパーとの商談が取れたことなど、結果的に見ると、経営者が元気で先が見えるということが商談のネタになっていた。これでよく分かったのは、「旦那衆」がアートなどを支援するのは、アーティストは先が見えているから。行き詰ったときにモノを変革する力がある。そういう変革力のある人間をまわりに置いておくと、新しいアイデアを得ることや考えることができる。てもそのアイデアに見合ったお金を出すことはできない。労働の対価しか払えないから。ところが、それを「旦那」として支払う。そしておくと、支払った金がアイデアとしてどんどん出てくる。だから損はない。そういう意味で、旦那衆はその役割を担っていったんだよね。成熟した社会は、そういったスポンサーをつける必要があるということだろうなと思う。まさに瀬戸芸（瀬戸内国際芸術祭）はその典型だよね。まちづくり運動には財界で会社を経営している人間が何人か参加することが大事だと思う。個別に運動する中で、財界のスポンサーが2、3人必要。もうひとつは、自分たちがコーディネーターで、漠然と集めるのではなく自ら動いて取りに行く、というのが重要だね。自分は興味がありそうな人を引っ張ってくることを繰り返している。繰り返していないと、その人が途中で興味がなくなることもあるわけだからね。逆に言えば、岡山のNPOの代表が1人くらい、財界の中に入っていて、企業から支援してもらうノウハウを作り、展開すべき。活動をするときは、決め込んでやらないといけない。30年もやればなにも言われなくなってくるから（笑）。

石原：30年ですか…僕はあと15年はやらないといけないです。

岡：自動車社会から、公共交通機関を活用する社会へ人の生き方を変える、地方都市を変える運動。コンパクトシティの運動。運動の質としては、これは原発運動と同じ市民運動だと思っています。中小企業で戦ってきて、弱者の立場にいたからその悲しさが分かる。一方、強者の立場も分かる。市民運動は基本的に弱い立場だから、排除の論理では無理です。政治は闘争。市民運動も

政治だから闘争。そのような意識をもつことも重要。

お金を集めるのも闘争なんです。日本のNPOが離陸できない理由はそこにある。

石原：経済的に自立てていないから羽ばたけない。

岡：だから、NPOに企業経営に関わったことのある人を入れることが必要と感じます。数字は「増える」ということが大事。リーダーが何らかの形で実績を残す。そうでなければ、組織は維持できません。手作りのものに現金の価値をつける努力をしなければ、市民運動は向上していかない。こうした運動の中で、市民活動が育つんです。リーダーが裁量を持って、能力的、物理的に自分が持ち出している事実を見せる。

石原：自分たちが生み出したものに、お金としての価値をつける。

岡：そして、個人のカラーを大切にして色々な人が色々な思いで活動しているのだから、少しでも賛成の人はすすんで取り込んでいかなければならない。のために、こちらが必要だと思うところには必ず声をかけておく。そうすると少なからず気にしてくれる。ただ、限界は必ずあります。だから、「自分たちは自分たちの仕事をする」。商売をしているから、「皆が何を求めるか」が分かる。相手の話も聞きながら、相手の求めるものを提示しなければならない。色々な価値をくっつけながら、きちんとお金で説明する。交渉の過程の中で自信があるもの、良いものは売れる。そういう意味では、努力したもの、勉強したことに勝るものはありません。

石原：学ぶという意味では、最近、岡山市長や岡山大学がポートランドへ行き、まちづくりの参考にしよう、学ぼうという動きがあります。でも、これは前から岡さんがおっしゃってのことですね。

岡：商売をしてきたから、「続けること」の価値が大きい。

石原：先ほどの「30年」ですね。

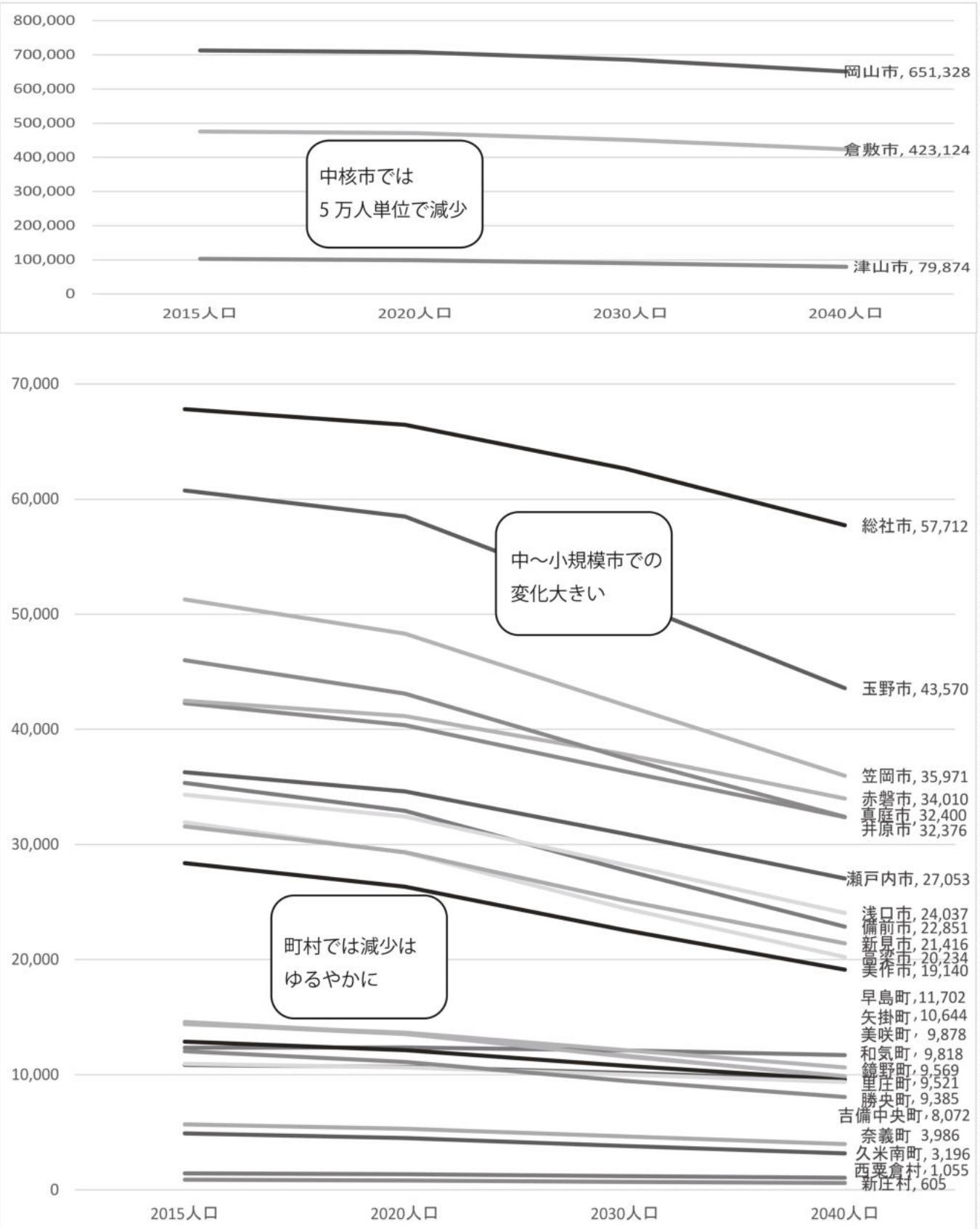
岡：それと、地元の人が成り立つまで手伝うこと。京橋朝市も、1年受付を手伝って僕は引いている。それでも続いている。何でも屋のようなコーディネーター役も必要。初めの何年かは面倒を見て、そのあとはできる人がすればいい。いつまでもやらない。降りるときに、次を見つけておくんだ。遊びどころをね。リーダーは常に次の遊びを探してておくこと。そうしたら良いリーダーになるよ。

石原：今日は本当に勉強になりました。ありがとうございました。

何でも屋のような
コーディネーター役も
必要。



補足情報 県内 27 市町村人口ビジョン（2040 年までの予測）※今回は速報。本調査の報告書は別途、発行予定です。



【制作・発行】 特定非営利活動法人 岡山NPOセンター 発行人 米良重徳（代表理事） 編集人 鈴木富美子（理事）

【お問合せ先】 〒700-0822 岡山市北区表町1丁目4-64 上之町ビル3階 電話 086-224-0995 FAX 086-224-0997（上記事務局）
E-mail npokayama@gmail.com URL <http://www.npokayama.org/> 業務時間 祝日を除く月曜日～金曜日

【発行日】 2016年12月1日